

石川啄木「呼子と口笛」の成立過程を解明するかぎ

——北原白秋「思ひ出」の衝撃的なかかわり——

近藤典彦

I

「ミネルヴァのふくろうは、たそがれがやってくるとはじめて飛びはじめる」といったのはヘーゲルである。

哲学的・学問的認識は現実の発展の完成した成果とともにはじめて成立する、という真理のいわば文学的定式である。作家を研究する場合にもヘーゲルの言は妥当する。石川啄木を論ずる者もまた、啄木晩年の到達点をふまえることを各自の研究の前提とする。無政府主義・社会主義思想および未完の詩集「呼子と口笛」は啄木晩年の到達点の重

要な指標である。ところがこの到達点に関して啄木研究には特殊な困難が七〇年来つきまとっている。啄木の親友であり、援助者であり、理解者でもあった碩学金田一京助が、啄木「晩年の思想的転回」を言い出したからである。以来金田一発言は、挫折の啄木、絶望の啄木、敗北の啄木等の啄木像の不尽の源泉となって今日にまでおよんでいる。

しかし金田一発言はあくまでも聞いたと称する事柄の報告であった。そこで金田一の言を信ずる人々は啄木の作品の中にそれを証明する資料をさがした。金田一自身をふくめて多くの人々がまずそれらしき資料として「見出した」のは「呼子と口笛」であった。はじめの六篇に比して「家」

の「トーンダウン」が著しいとされ、それが特に強力な根拠となった。戦後普及した「はてしなき議論の後」の「八」と「九」も似たような扱いを受けた。(また、「悲しき玩具」の中のあれこれの歌が、あるいはもつと手がこんで啄木の「理性主義」の分析が、その他が、根拠としてとり出されて来るがそれらには有効な批判がすでになされている。ここでは措くことにしよう。)

したがって「呼子と口笛」の成立過程の研究は、新しく啄木像を構築しようと思う者にとっては決定的に重要な作業の一つである。本稿においては紙幅を考慮して、成立過程研究のこれまでの到達点と残された問題点の確認、および成立過程解明のかぎをなす、「思ひ出」(北原白秋)の特殊なかかわりの考察を行ないたい。

成立過程の研究に関する先人の諸業績のうち本稿と関連の深い問題提起をしたのは岩城之徳と今井泰子である。ここでは両氏の業績を足場としてわたくしの立論を示してゆきたいと思う。岩城の「呼子と口笛」の成立をめぐる問題⁽⁴⁾から見てゆこう。氏の論文の要旨は以下のごとくである。

啄木は明治四四年六月一五日から一七日にかけて長詩「はてしなき議論の後」をつくった。そしてこれを完成後ただちに大学ノートに清書した。この長詩は九つの詩から成り立っている。内容は一「暗き、暗き曠野にも似たる／わが頭脳の中に……」、二「我等の且つ読み、且つ議論を闘はすこと……」、三「我は知る、テロリストの／かなしき心を——……」、四「我はこの国の女を好まず……」(以上六月一五日夜)、五「我はかの夜の激論を忘ること能はず、……」、六「我は常に彼を尊敬せりき、／しかして今も猶尊敬す——……」、七「わが友は、古びたる鞆をあけて、……」(以上六月一六日)、八「げに、かの場末の縁日の夜の／活動写真の小屋の中に、／……」、九「我が友は、今日もまた、／マルクスの「資本論」の／難解になやみつつあるならむ。／……」(以上六月一七日。九については推定)である。

啄木はこのノートへの清書が終わった前後——おそらく六月一八日頃この作品中の「一」、「八」、「九」の三つを除いた六篇を別の原稿紙に写し、推敲し若山牧水の「創作」に送った。

さてその後六月二五日に「家」という詩を作ったが、こ

の間第二詩集の編集を思いたつたらしく、「呼子と口笛」という詩稿ノートを作った。そして「創作」に送った六篇をさらに推敲し、従来の長詩としての構想を捨て、各篇に標題をつけ独立した作品としてこのノートに書き入れた。これに「家」を加え、さらに六月二十七日の日付のある「飛行機」を入れた。啄木は以後も逐次作品を書き入れて一冊の詩集たらしめようと考えていた。

でははじめの詩稿、長詩「はてしなき議論の後」を作った直接の動機は何か。若山牧水の主宰する雑誌「創作」の巻頭をかざるものとして依頼されたこと、である。

なぜ啄木は「一」、「八」、「九」の三篇を除いて「創作」に発表し、更に「呼子と口笛」を編纂するにあたっててもこれを除いたのか。(ここで岩城は当時北大大学院生であった今井の論稿を借りつつこう推定する)「八」、「九」が「創作」への原稿から除かれたのは、これらの調子が弱すぎて他の各篇と同列におくことが憚られたからであろう。終曲ともいえる「八」、「九」を除いてしまえば長詩全体のまとまりはくずれる。「一」は他の詩篇とちがって具体的素材をあつかっておらず、以下に詩情が展開することを予想してはじめて存在しえた序詩ともいえるから、「八」、「九」がな

くてはつけたしになってしまう。「呼子と口笛」からもほぼ同じ理由でこの三篇は除かれた(なお岩城は逆の考え方もまた捨てがたいとしているが)。

岩城はさらに「七」、「八」、「九」と進むにつれて作者の弱々しさ、受動性がさらけ出されているのは事実であるとして他の原因をも探る。当時の啄木と妻の実家堀合家との義絶事件である。「はてしなき議論の後」が激しい革命の思想をひらめかせながらも、次第にその情熱がうすれ、遂には「呼子と口笛」の「家」などにおける一都市居住者のかなしいつぶやきに終わっているのは、背後にかなり複雑な要因をもった義絶事件があったためである、とする。

次に今井の所論に移ろう。「石川啄木集 日本近代文学大系23」(角川書店)の補注二三六、および「石川啄木論」(塙書房)の三六二〜三九〇頁に詳しく見解が述べられているが、ここではもっとも簡潔にまとめられている「石川啄木の手帖」(『国文学』一九七八年六月臨時増刊号)の中の一項「呼子と口笛」によって見ることにしよう。

この未完の詩集が成立するまでの詩稿のさしかえ、推敲等に関する事実経過について、また「創作」から執筆依頼があり、それが一つの執筆動機であったであろうことにつ

いては今井と岩城の見解は一致している。⁽⁵⁾問題はその先にある。

今井は言う。「呼子と口笛」の「始めの六篇ないし初稿九篇(すなわち『はてしなき議論の後』一〜九——引用者)は社会主義社会にいたる架橋を周囲にも、自らのうちにも見出せぬまま、なおそれを激しく希求する者の苦悩を歌う詩に他ならず、素材を異にする次の『家』『飛行機』にも、現実的架橋を欠きつつ見果てぬ夢を恋うという発想が貫かれている。

初稿『八』によれば、この詩群は北原白秋の詩集『思ひ出』(明治四四・六・五)、とくにその『断章』三十五、三十六に触発されて制作された。左横書という斬新な形式も、詩集としての体裁も、如上のモチーフも、すべて白秋に対する対抗意識と密接に関係していよう。あわせて、絶望的な病状および生活環境にありながらそれほどの刺激を『思ひ出』から受けたという点に、詩人としての見果てぬ夢という生身の啄木自身のテーマがうかがえる(圏点は引用者)。

以上は今井に独自の見解である。

さて岩城・今井の業績のうち、文献資料にもとづいて解

明された部分および「はてしなき議論の後」の執筆動機にいたる部分までのすぐれた論述については、わたくしは異論をもたない。また今井の見解のうち、白秋の「思ひ出」が啄木に与えたインパクトとその大きさを指摘している点については高く評価するものである。

しかし両者の見解は次のような諸問題点をもっている。一、初稿「八」、「九」のトーンダウンは誰の目にも明らかであるが、両者ともにその理由を説明することに成功していない。

二、右の正しい理解がないために「一」、「八」、「九」が「創作」において省かれた理由をも十分に説明できていない。

(以上の二点は「呼子と口笛」成立過程の前半部分の問題である)

三、両者ともに「呼子と口笛」制作の意図、したがってこの詩集の基本的性格を明確に示していない。今井は「思ひ出」への対抗という貴重な視点を獲得しているにもかかわらず成功していない。金田一発言に惑わされて明治四四年初夏より啄木の「思想崩壊」が始まるとする見地が底にあるために、せっかくの視点が生きてこないのであ

る。

四、以上三点が正確にとらえられていないから、「呼子と口笛」の直接的成立過程の考察にも成功しない。

五、したがって作品理解に誤りを生じ、ひいては啄木像構築にも問題を生ずる（今井の場合は逆ともいえるが）。作品理解の誤りのうち最も大きなものは、第一点とも関係するのだが、両者はともに初稿における、「八」、「九」のトーンダウンと「呼子と口笛」の「家」の「トーンダウン」とをいっしょくたにし、同列に論じてしまうことである。

○岩城（昭和三〇年代の）はいう。（初稿が）「……七・八・九と進むにつれて作者の弱々しさ、受動性がさらけだされ……格調の高い革命の情熱がまったく失われているのは、何かその他にも原因があるのではなからうか。そしてこの疑問は、『はてしなき議論の後』の一週間後に、これとは全く性質を異にする『家』『飛行機』の作られていることから一層深められる。」

「『家』には中野重治が指摘したような——引用者）啄木の弱さを感じられるのは事実であり、此処では彼の社会主義的な思想や感情が全く姿を消している。これは『詩人

としての石川啄木』が『思想家啄木』に追いつけなかったというだけでは解決できない一つの疑問が存在する」と。金田一の「転回説」を信じない岩城はこの疑問を解くかぎとして啄木の家庭生活における「封建的」「独善的」側面にあらわれている「個人主義的ヒューマニズムの未熟さ」を持ち出す⁽⁷⁾。

○今井も岩城と共通する次のような読みを示す。「八・九」二篇の情感が他と比べて目立って弱々しい。「呼子と口笛」の始め六篇の格調がかなり強いのに対して現実を歌う『家』・『飛行機』が持つ暗さ……」。今井の場合この読みは、第三点目でも指摘したが金田一発言と深くかかわっている。「……八・九」が彼の予期に反したように『家・飛行機』も彼が『呼子と口笛』に取りくんだ意図と反して、彼の意識下に潜在していた問題を露呈させたのだ」という一文は今井の誤解とその根源、また今井の啄木像の原型をこよなく明らかに示している⁽⁸⁾。

II

以上の諸問題を解決するためには一つのかぎが必要であ

る。そのかぎによって、はじめのトーンダウンの真の理由が明らかにされるであろう。その謎が解けるならば、問題は次々に解けてゆくであろう。かぎとは北原白秋の第二詩集「思ひ出」にかかわるものであった。(先に断ったとおり本稿の主題はこのかぎの発見にしろられる)

今井はこの詩集が初稿制作の前に啄木に渡り、衝撃を与え、その影響が「呼子と口笛」にいたる全詩群に及んでいったとする。わたくしは初稿「七」の制作と「八」の制作との間に「思ひ出」が衝撃を与え、それが以後の過程にある意味で規定的に作用した、と考える。啄木が「思ひ出」を手にした日時は明治四四年六月一七日の日中であろうとわたくしは推定する。

六月一七日に何が起こったのか、事実をまず見てみよう。

暗き、暗き曠野にも似たる

わが頭脳の中に、

時として、電のほとばしる如く、

革命の思想はひらめけども——

……

明治四四年六月一五日の夜、啄木はこのようにうたい出

す。そしてこの夜は、四「……我はこの国の女を好まず。」までが作られる。翌一六日、五「我はかの夜の激論を忘ること能はず……」とうたい出され、七「……そは美しにもあらぬ若き女の写真なりき。」で終わる。この「若き女の写真」のモデルは明治天皇暗殺を謀った管野すがであるとも、ロシアのアレクサンドル二世を暗殺したソフィア・ペロフスカヤのようなナロードニキの女性であるとも(9)いわれる。「二」、「三」、「四」、「五」、「六」の詩はそれぞれ、日本の知識青年たちと(五〇年前の)ロシアのナロードニキの青年たち、幸徳らのグループとナロードニキ、丸谷喜市とナロードニキの青年、妻節子とナロードニキの若い女性、大逆事件の宮下太吉や啄木自身とバクーニンらアナキストおよびヨーロッパの先進的労働者というふうに二重のイメージをもった人物像を軸にしてうたわれている。というよりも素材を日本人の中の誰彼(大逆事件関係者または身近な人物、または一般的な知識青年や啄木自身)にとりつつ、ロシアのナロードニキ、アナキストらとダブらせてうたってゆくのである。「七」もこの二重のイメージをもっていて、同一の質をもった詩群の中の一編であることはまちがいない。ところが翌六月一七日、突然、まったく突

然問題の詩が現われる。

八

げに、かの場末の縁日の夜の
活動写真の小屋の中に、
青臭きアセチリン瓦斯の漂へる中に、
鋭くも響きわたりし

秋の夜の呼子の笛はかなしかりしかな。

ひよろろと鳴りて消ゆれば

あたり忽ち暗くなりて、

薄青きいたづら小僧の映画ぞわが眼にはうつりたる。

やがて、またひよろろと鳴れば、

声嘎れし説明者こそ、

西洋の幽霊の如き手つきして、

くどくどと何事をか語り出でけれ。

我はただ涙ぐまれき。

されど、そは三年も前の記憶なり。

はてしなき議論の後の

疲れたる心を抱き、

同志の中の誰彼の心弱さを憎みつつ、

ただひとり、雨の夜の町を帰り来れば、

ゆくりなく、かの呼子の笛が思ひ出されたり。

——ひよろろと、

また、ひよろろと——

我は、ふと、涙ぐまれぬ。

げに、げに、わが心の餓えて空しきこと、

今も猶昔のごとし。

今井が指摘するところには明らかに「思ひ出」の中
の「断章」三十五、三十六が色濃く影を落としている。

三十五

縁日の見世ものの、臭き瓦斯にも面うつし、

怪しげの幕のひまより活動写真の色は透かせど、

かくもまた廉白粉の、人込のなかもありけど

さはいへど、さはいへど、わかき身のすべもなき、涙

ながるる

鄙ひなびたる鋭き呼子そを聞けば涙ながるる。

いそがしき活動写真くわつどうしやしん 煤すすびたる布に映すと

かりそめの場末の小屋に瓦斯の火の消え落つるとき、
鄙ひなびたる鋭き呼子そをきけば涙ながるる。

明治四四年六月五日に発行された「思ひ出」を啄木が手にしたのは六月一七日であったとするわたくしの推定は以上の事実から発した。そしてこの推定は以下のような根拠を持つのである。

一、啄木は明治四二年一〇月の妻の家出事件を直接の契機にしてその思想も文学も生活態度も現実という大地に深く根ざし始める。翌四三年六月に発覚した幸徳秋水らの「陰謀事件」に激しいショックを受け「国禁の書」たる社会主義関係の文献を手に入れては研究するようになる（この頃の社会主義関係の文献には社会改良主義的なものからマルクス主義、無政府主義までのさまざまな潮流のものが含まれる）。そして四四年一月には「僕は……将来の社会革命のために思考し準備してゐる男である」と言い、また次のように言いきるまでにその思想を育て上げる。「……僕は必ず現在

の社会組織を破壊しなければならぬと信じてゐる、これ僕の空論ではなくて、過去数年間の実生活から得た結論である、……僕は長い間自分を社会主義者と呼ぶことを躊躇してゐたが、今ではもう躊躇しない、無論社会主義は最後の理想ではない、人類の社会的理想の結局は無政府主義の外にない」と。そしてこの月「日本無政府主義者陰謀事件経過及び附帯現象」をまとめる。二月クロボトキンの自伝「Memoirs of a Revolutionist」を読む。五月「A LETTER FROM PRISON 'V' NAROD' SERIES」を執筆（なお日記によると五月一日若山牧水が「来て十時近くまで話して行つた」とある。「創作」巻頭を飾る長詩の原稿を依頼していった公算が強い）。

そして六月一五日と一六日に、このような思想的達成、社会主義研究、当時の国家権力と社会構造への批判、の上立って「一」から「七」までの詩をうたいあげたのである。白秋の「思ひ出」の影響は絶無である。あるのは大逆事件後の明治末期の重苦しく暗い社会の底にあってなお屈せぬ青年詩人の鋭い批判であり、明日の考察を捨てようと思ふ強靱な精神である。「忘却のための記念」「深夜に記す」を書いた魯迅に通う。

岩城はこの一連の詩の失速は「七」から始まるように感じていたようであるが、さきにふれておいたように題材は「一」「七」に共通している。しかしその共通性は「八」においては欠如していて縁もゆかりもない。あくまでも断絶は「七」と「八」の間にある。突然ここで失速するのはよほど大きな精神的打撃があったからでなければならぬ。妻の実家との義絶にまで発展する事件は六月三日頃より始まるが、それが詩の内容をも調子をも六月一七日の時点で一挙に変えてしまうということは、この時期の啄木の場合には考えられない。

「思ひ出」の影がかほども黒々と「八」の上に落ちていくことを考えれば、「思ひ出」のインパクトがまさに「八」の制作直前に啄木を襲ったのだと見るのが妥当であろう。

二、啄木と白秋の明治四一年夏から四二年四月初めまでの関係を調べることで次の何点かを指摘できる。

○ 啄木は白秋を詩人中唯一最大のライバルと目していた。そして白秋の「断章」を手ばなしで賛美していた。

〔日記〕四一・九・一、九・一〇、一二・一一など。

○ しんから誰かに感服したときにはその人の書体なり歌なり詩なりをほとんど反射的に模倣するのは啄木の性向

であったが、白秋の「断章」にひどく感動した日には「断章」そっくりの詩を何篇も作っている〔日記〕四一・九・一。

○ 啄木は「邪宗門」に集められたような詩には批判的であったにもかかわらず、「邪宗門」を贈呈されたときには「なんだか詩を書きたいような心持にな」ったと言いつつ、同時にライバルの成功に強い衝撃を受ける。そして日記はローマ字に変わってしまう(四二・四・三)。「ローマ字日記」の世界は事実上ここから始まる。

○ 河村政敏の指摘によると(注(11)参照)、四二年一二月の詩「夏の街の恐怖」にも「邪宗門」の影響が認められる、という。

以上の諸点を考えあわせるなら、啄木は「思ひ出」を受けとったとき強い衝撃を受けたであろうことはまずまちがいないであろう。そして「はてしなき議論の後」の「八」がいかに「思ひ出」風であるとすれば、それが衝撃の直後につくられたと考えるのが自然であろう。

三、「邪宗門」を出版したとき、白秋は明治四二年四月三日に、ばあや三田ひろの手で啄木のところへ一冊届けさせている。郵送したりせずに一軒一軒届けさせたものらし

い。交通の便のわるい当時のこととて、またばあやにはほかに家事などがあることゆえ、一日にほんのわずかしか届けてまわれなかったことであろう。または何日か一度しか出かけられなかったことであろう。発行日が三月一日であるから、一九日を経て初めて届けられたことになる。三月以降は啄木が東京朝日新聞社に勤めるようになってきたこともあってあまり会うこともなくなるが、この年の一月、二月の二人の厚誼は目を見るばかりである。その親しさにあっても一九日間して初めて届けられたのである。

「思ひ出」の発行は明治四四年六月五日である。二年間近く直接的な交流がほとんどなくなっている明治四四年の六月であること、牛込北山伏町から京橋木挽町へ(つまり啄木の家からはより遠くに)白秋が引越していること、またばあやは白秋のところを出て下谷に貸本屋を営んでいたこと、などを考慮すれば、「思ひ出」が発行後一二日目に届けられたとして遅すぎるということはない。むしろ早目に届けられている。六月一七日という推定にはこの面からも蓋然性の、ある一定の大きさを見ることができよう。

四、何者かによって切りとられたこの月の日記にかわって重要な資料となるのは「悲しき玩具」の歌稿ノート「一

握の砂以後(四十三年十一月末より)」とその関連文献とである。さいわいなことに六月の作歌四七首には啄木自身が一括して「六月」と明記している。このノートの歌が「ほほ創作順に収録したものである」ことは、「ほほ」⁽¹²⁾という条件に留意するなら大方の異論のないところであろう。

ところで六月詠の歌群は三つのグループに分けられる。雑誌「新日本」に掲載された歌群プラスこのノート初出の三首からなるはじめの二二首(「新日本」グループと呼んでおこう)、次に記載されている「文章世界」への一〇首(「文章世界」グループ)、「層雲」掲載の歌群プラスノート初出の四首からなる最後の「一五首」(「層雲」グループ)、である。この三グループが制作順であろうことは山田平・今井・藤沢全らの研究⁽¹³⁾に徴してみてもまちがいのないところであるが、さらに次の諸点を指摘して制作順の問題を確定しておこう。

○「新日本」に掲載された歌には、六月以前に制作されおそらくは歌稿ノートへの記載もすんでいたであろう歌群(いわば古い歌群)からも七首がとられており、これらに六月詠草一九首をあわせて原稿がつくられ、発送された。

○ このグループの最後の歌「病みて四月——……」は「文章世界」グループの最初の歌と初句が同じであって、つながりが見え、しかもこの一〇首は「五歳の子」というテーマで一貫している。したがって「新日本」グループの最後の歌を詠んだあと同じ初句をつかって次の歌ができ、そこで一気に子供をテーマとして詠んでしまい発送までしてしまったのではないかと推定される。

○ 三誌のうちで前二者の発行予定日は七月一日だが「層雲」のみは七月一〇日であり、原稿締切りは最も遅かったであろうから、「層雲」用の原稿があとまわしになっただであろう。

○ 今井・藤沢は歌稿ノートの六月詠草には推敲加筆のあとが見られ、雑誌発表のものが最終形態であると言う。藤沢はそこから「最初に詠草を歌稿ノートに書き留めておき、そのうち四〇首を」三誌に送ったと見る。前二誌についてはまづこの推定は正しいと思われるが、「層雲」についてはまづ正しいである。そこではいくつかの歌の（とくにあとで問題になる二つの歌の）最終形態は歌稿ノートに記載されているものであり、原稿発送後のある時期にこのグループの歌は推敲され、しかるのちにノ

トに記載されたのだからである。

したがって前二グループと「層雲」グループの間には時間的前後関係の外に、歌稿ノートへの記載の時期や方法上のちがいもあることになる。

三グループの制作順は動かぬところであろう。

では次にこの三グループの歌がいつ頃作られ発送されたのかを問題にしよう。啄木は翌月一日発行の雑誌に対して原稿をいつ頃発送し（または渡し）ていたであろうか。明治四四年分を「日記」で確認してみると次のようである。

「創作」へ。一月一八日に二〇首。

「早稲田文学」へ。二月二二日に一二首。

「文章世界」へ。二月一二日に一〇首。

「創作」へ。二月一九日に一八首。

「精神修養」へ。三月一八日（推定）に一〇首。

「詩歌」へ。八月二二日に一七首。

二月には三誌からの注文があったので二誌へは一二日に、残りへは一九日に送稿している。そうでないときは一八日から二一日の間である。岩城が調べた明治四三年の「創作」への短歌送稿日は一三日と二二日である。

今問題になっている六月の分としては「創作」からの詩の

依頼もふくめて四つもの雑誌から原稿依頼があった。したがって啄木は制作の予定をある程度は考えていたにちがいない。ましてひさびさの長詩の制作予定がある。「はてしなき議論の後」にとりかかったのは、一五日である。おそらくこれ以前に二誌分の制作を終え発送したと考えてよいであろう。もし三誌分を終えていたと仮定してみると、六月詠草四七首が一五日以前に作られたことになる。前述のような「層雲」グループの性格を考えるなら、このグループのみが長詩制作以後に予定されたと考えるのが妥当であろう。「層雲」グループの歌の大部分が作られたのは六月一五日以降であり、送稿されたのは「はてしなき議論の後」が「創作」におくられた直後であろう。このグループの歌のみが送稿後に、推敲されて歌稿ノートに記載されたことが、この間の事情のあわただしさを物語るのである。「層雲」は発行日を早め七月一日に発行したらしいから、送稿は月末ではなかったであろう。

さて、歌稿ノート六月分四七首中の一四、一六、一七番目(以上「新日本」グループ)と二九番目(「文章世界」グループ)にはそれぞれ次の歌がある。

ポロオデンといふ露西亜名が

何故ともなく、

幾度も思ひ出さるる日なり。

友も、妻も、かなしと思ふらし——

病みても猶、

革命のこと口に絶たねば。

やや遠きものに思ひし

テロリストの悲しき心も——

近づく日のあり。

「労働者」「革命」などといふ言葉を

聞きおぼえたる

五歳の子かな。

一七番目の歌が「はてしなき議論の後」の三「我は知る、テロリストの／かなしき心を……」と同じ世界をうたっていることをはじめ、他の三首もまた「一」から「七」までの世界と共通の世界であること、言を要しない。「はてしなき議論の後」の世界はまず短歌としてかたどられたのであり、ついでその世界は長詩によってかたどられ

たのである。

こうした歌ではなくとも「文章世界」グループまでの三二首には「思ひ出」の影響らしきものは一切見出せない。

ところが「層雲」に掲載された一首中の六首目に次の歌がある。

新しきインクの匂ひ、

目に沁むもかなしや——

夏の雨の明るさ。

この歌は歌稿ノートの中では、三行目が「いつか庭の青めり。」と推敲されて「層雲」グループの冒頭におかれている。六月詠草四七首中では三三番目である。推敲されたこの歌に関する今井のすぐれた注を引こう。「『新しきインクの匂ひ』は『目に沁む』に呼応し新しい印刷の匂い。……」⁽¹⁴⁾「新刊書購入の余裕などない啄木なのだから、これは『思ひ出』を指す歌と見るべきであらう。それ以外ではありえない。さらに言えば「目に沁むもかなしや」の「や」のつかい方である。詠嘆を表すこのような「や」をこの時期の啄木がつかう例を外に見出せない。「悲しき玩具」の中にもないし「一握の砂」にもない。「思ひ出」の中には見える。白秋はつかう。「長崎の、長崎の／人形づくりは

おそろしや」「泣いた年増がなつかしや」「虫のさけびの厭はしや」等。「思ひ出」が「悲しき玩具」の中ではじめてその影響を見せたとき、その歌の題材そのものが「思ひ出」なのであった。

第四点目の考察は長くなったが、①「思ひ出」が一日以前に届いたということは九分九厘ありえないこと、②「はてしなき議論の後」(一〇九)にあっては「八」にいたったとき(一七日)、急に「思ひ出」の影響があらわれたのであったが、「悲しき玩具」の中でも今見たように、急に、一日を過ぎたここで、「思ひ出」の影響があらわれたのであること、これが論証されたといつてよいであらう。

「思ひ出」が届けられた日は「七」を作り終わった一日とも考えられるわけだが、「新しきインクの匂ひ……」の歌は、とくに初出歌に明らかなように、日中の歌である。啄木が「思ひ出」に目を通したのは、以上全てを根拠として、六月一七日であると断定してよいのではなからうか。

ついでにいえば、当時はうっとうしい梅雨時である。気象庁統計室でわたくしが調査したところ(ここでは詳細を省くが)一四日夕方から一七日の午前中まで日照時数(チヨル

ダン型)はゼロに等しい。しかし一七日の午後一時すぎから午後いっぱい十分に高い日照時数を示している。うすい雲はあったらしいが陽光はそれをつき破ってふりそそいでいたらしい。「夏の雨の明るさ。」「目に沁む」「いつか庭も青めり。」に統計はきっちり照応しているのではなからうか。

「思ひ出」の衝撃が啄木を襲ったのが六月一七日であったとして、問題がもう一つ残っている。衝撃の質の問題にもふれておこう。

ひとところ、畳を見つめてありし間の

その思ひを、

妻よ語れといふか。

この歌は「層雲」では「新しきインクの……」の次である七首目に「語れといふや」として置かれ、歌稿ノートでは「層雲」グループの冒頭に同じく並べて置かれている。作者がこの二首をセットと考えていたことはこれによってもわかる。であるならば「畳を見つめてありし間の／その思ひ」とは何であったのであろうか。いうまでもなく、強烈な「思ひ出」のインパクトがもたらした深いもの思いで

ある。夫の放心状態のような異様なもの思いにおどろいた妻が、夫を気づかしたのである。

このインパクトはなぜ強烈であったのか。その理由は次の二点に要約できるであろう。

一、啄木は当時病におかされていて半年近くも出勤できないのであった。その上に貧窮、住居からの追いたて、妻と母との不和、夫婦間のかなり傷の深い争い、妻の実家との義絶、「死に身」になってやろうとした「樹木と果実」発刊計画の挫折、大逆事件の「まっ黒な反動の嵐」(荒畑寒村)等という状況の下におかれていた。このほとんど極限的状况を生きつつ、「はてしなき議論の後」を制作しているところに「思ひ出」が届いたのであった。瀟洒なしかも贅沢な詩集であった。この第二詩集の文学的成功は啄木の炯眼には一目瞭然であったらう。詩人として最大のライバルであった白秋の恵まれた経済的条件(すでに柳河の家は没落していたとはいえず)と受けるであろう榮光と洋々たる詩人としての前途。「思ひ出」はまばゆい光を放っていた。この彩りゆたかな光に照らし出されて、啄木は自分のおかれていた状況をすみずみまで見ていたことであろう。先に見た白秋との二三年前の関係を考えあわせるなら、二五

歳の青年がこの時受けた衝撃の大きさは察するに余りある。

二、インパクトは二重であった。他の一面は白秋の詩そのものの美しさが与えたものであった。自分がきびしく批判している「邪宗門」にさえうたれた彼である。まして「思ひ出」は、特に「真の真の詩」として賛嘆していた「断章」はあまりに美しかった。このとき啄木の詩神は「断章」の旋律に完全に共鳴したにちがいない。

かくて三〇〇四〇年来の謎であり、多くの誤解の素であった「八」「九」のトーンダウンの理由は明らかになった。それは思想上の「転回」「転換」「挫折」、また「ヒューマニズムの未熟さ」等と無縁であった。

本稿はこれで終わる。本稿のIの最後において指摘した諸問題点のうち解明されたのは第一点目だけである。しかし、本稿につづく次の二つの小論もすでに仕上げられてある（昨年六月脱稿）。

○石川啄木「呼子と口笛」成立直前の一過程

——白秋「思ひ出」の影響とそこからの脱却——

○石川啄木「呼子と口笛」の成立

これらの中において、わたくしは「呼子と口笛」の成立過程を内面的に考察することを、そして残された諸問題点に関する一定の解答を与えることを、試みてある。機会を得て御批判を仰ぎたい。

注

(1) ヘーゲル「法の哲学」(藤野涉 赤澤正敏訳 中央公論社) 一七四頁。許萬元「認識論としての弁証法」(青木書店) 二〇六頁。

(2) 金田一の「転回」説についてわたくしは独自の仮説をもっている。別稿で論じたい。

(3) たとえば「悲しき玩具」のあれこれの歌を問題にした秋山清「啄木私論」(『文学』一九六二年六月・八月) に対しては石井勉次郎「啄木評価に関する一提言」(私伝 石川啄木) 桜楓社 所収) が、「理性主義」を問題にした今井泰子「啄木晩年の所謂思想転換問題」(『日本文学』一九六二年七月) には多良学「啄木の所謂「理性主義」について」(『日本文学』一九七四年三月) が、それぞれ正鶴を得た批判をしている等。

(4) 「国語国文研究」(一九五七年四月)。

- (5) 今井の論文『呼子と口笛』をめぐって」(『国語国文研究』一九五九年二月)三五頁を参照されたい。
- (6) 前掲「啄木晩年の所謂思想転換問題」。
- (7) 前掲注(4)および「人物叢書 石川啄木」(吉川弘文館)二三〇～三頁。
- (8) 前掲『呼子と口笛』をめぐって」。
- (9) 吉田孤羊「石川啄木と大逆事件」(明治書院)五三頁。
- (10) 岩城之徳「石川啄木」(桜楓社 一九七六年刊のもの)一四四～五頁。
- (11) 次の諸氏の研究はとくに参考になった。今井泰子前掲の諸文献。山本健吉「漱石 啄木 露伴」(『文芸春秋』)。河村政敏「白秋と啄木」(『国文学解釈と鑑賞』一九八五年二月)。
- (12) 藤沢全「歌集『悲しき玩具』」(『国文学』一九七五年一〇月)。
- (13) 山田平「『悲しき玩具』の成立について」(『日本文学』一九六九年九月)、今井泰子「石川啄木集 日本近代文学大系23」(角川書店)補注一一五、一二八、一三四、一三五、一四六、一五〇。藤沢全、注(12)参照。
- (14) 「石川啄木集 日本近代文学大系23」(前掲)二〇二頁および「石川啄木論」(『塙書房』)三八二頁。

※ 本稿は成城学園教育研究所の一九八四～五年度研究助成による研究の一部である。